

教育の質保証 ―ティーチング・ポートフォリオ

弘前大学名誉教授 大 関 邦 夫

もう半年以上前のことですが、私にとって「教養」という言葉がとても新鮮に思えた瞬間がありましたので紹介させていただきます。それはNHKのシルクロードに関する放送の一場面です。旅人が遊牧民の暮らす大草原を旅して、あるゲルの近くに野営することを許され、その晩たき火を囲んで、ゲルの主人の歓迎を受けます。穏やかに流れる時間のなかで、旅人はゲルの主人に「あなたにとって大切なものはなんですか」と尋ねます。するとその主人は傍らの息子に目をやりながら「一番大切なのは息子です。」と答え、続けて「次に大切なものは教養です」と答えたのです。大草原で脈々と生活を紡いできた、そしてこれからも紡いでいこうとする遊牧民にとって、子供と教養こそが大切であるという考えは、より複雑な現代社会で暮らす我々にとっても当てはまるものです。ゲルの主人の「教養」とは生きるための総合的な力のことだと思います。それは生活に必要な技術、他人や社会との関わり方の基礎となる自身の在り方や生き方等の総合的なものを指しているのだと思います。子供と総合的な生きる力は、現代社会が求める持続的発展のキーワードではないでしょうか。

それでは、教養教育をどう捉えたらよいのでしょうか。2006年9月4日付けの日本経済新聞に東京大学の小宮山宏先生が東大から発信する教養教育のモデルについて寄稿された記事が載っています。小宮山先生は、「最近、海外の学長と顔を合わせると、「教養教育」がよく話題になる。どこの国でも、専門教育の強化と共に教養教育の充実が課題となっているのである。その背景にあるのは、複雑化した社会と細分化した学問の現状だ。」と述べた上で、「専門教育がそれぞれの分野における知識と学力、いわゆる“専門知”の習得を旨とするものであるならば、教養教育の目指すところは“総合知”の形成と呼ぶべきものである。総合知は個人が社会における自らの位置づけや活動の意味を把握しつつ、主体的に・自律的に人間らしく生きていくための力である。」と述べています。

いまや、大学はこれまでに経験したことのない困難に直面しています。文科省の試算により、2007年度から、大学・短大の収容力（入学者数／志願者）が100%に達し、大学を選び好みしなければ全員が入学できる全入時代を迎えるからです。大学全入時代は、18歳人口の減少に伴う志願者の減少と大学の増加という2つの要因からもたらされたものです。日本経済新聞（2006年9月4日）クイックサーベイ欄の報道によると、1992年度に205万人いた18歳人口は、2006年度には133万人と激減したのに対して、4年制大学数は、この間だけで200校以上増加し、744校に達したとのことです。さらにこの欄に、「大学全入時代をどう思う？」という全国の20歳以上の1,000人から回答を得た調査結果が掲載されました。その結果は、歓迎する：15.7%、どちらともいえない・わからない：39.8%、歓迎しない（問題だと思う）：44.5%というものでした。

それぞれの理由を複数回答で求めた結果、歓迎するとした理由として、入りたい大学に入りやすくなる（61.6%）、受験競争が緩和される（45.2%）、大学間競争で授業料など安くなる（40.1%）、大学を中身で選ぶようになる（40.1%）、何歳でも大学に行けるようになる（35.7%）、大学教育が一層大衆化される（32.5%）でした。また、歓迎しない（問題だと思う）とした理由については、レベルの低い大学生が増える（81.8%）、大学教育の質が下がる（54.2%）、受験勉強が減り高校以下の学力が低下する（51.5%）、大卒の肩書きが意味を失う（48.5%）、私学助成金が無駄になる（44.5%）、大学間の格差が広がる（22.7%）という結果でした。大学生の学力のレベルが下がり、大学教育の質も低下することが問題視されていることが分かります。

では大学そのものは、全入時代の到来をどう捉えたらよいのでしょうか。「大学全入時代の到来」と

いっても、「受験生が大学・短大を選び好みしないで、合格できる大学に入学する」と仮定した場合のことですから、実際に入学率が100%になることはなく、「大学が入学生を選抜する時代から、受験生が大学を選択する時代」へ移行しつつあるということです。

受験生から入りたいと思われる大学、選ばれる大学となるためには、どうあるべきでしょうか。その答えは「大学としての質」を高めることにあると思います。

大学の質とはいったい何でしょう。中央教育審議会答申（平成17年1月28日）“我が国の高等教育の将来像”（以下答申と略す）に、「保証されるべき高等教育の質とは、教育課程の内容・水準、学生の質、大学教員の質、研究者の質、教育・研究環境の整備状況、管理運営方式等の総体を指すものと考えられる」と述べられています。

社会に対する責任からいえば、卒業生の質保証こそが大学の使命であると考えられます。「学士課程教育では教養教育及び専門分野の基礎・基本を重視し、専門的素養のある人材を育成すること」が求められていますから、このような人材を世に送り出すことが使命といえます。

教養教育を評価する側の大学評価・学位授与機構は教養教育をどう捉えているのでしょうか。「教養教育」実情調査票に教養教育の要素として32項目が提示されており、これらに対して特に組み込んでいない「組み込む方向で検討中である」「組み込んでいる」「組み込んでおり、特に重点をおいている」のどれに当てはまるかを回答させています。教養教育の要素として、高い倫理性を持って判断し行動できる能力の育成、高い責任感を持って判断し行動できる能力の育成、自らの文化に対する理解の促進、世界の多様な文化に対する理解の促進、外国語によるコミュニケーション能力の育成、外国語の習得を通じた外国文化の理解、2つ以上の外国語の習得、論理的な文章を書く能力の育成、プレゼンテーション能力の育成、討論能力の育成、課題発見能力の育成、情報リテラシーの向上、科学リテラシーの向上、数理リテラシーの向上、人文学各専門の基礎的な知識及び方法の習得、社会科学各専門の基礎的な知識及び方法の習得、自然科学各専門の基礎的な知識及び方法の習得、諸科学を超えた学際的な知識の習得、芸術鑑賞能力の育成、芸術的な表現能力の育成、身体運動能力の向上、健康な生活を営む能力の向上、環境問題に関する理解の促進、国際問題に対する理解の促進、ジェンダー問題に関する理解の促進、社会問題に関する理解の促進、職業間の育成、人間関係能力の向上、自己発見の援助、ボランティア意識の育成、大学における学習への適応能力の育成、高等学校程度の補習教育の実施が挙げられています。これらの総体として教養教育を捉えていることが分かります。

さらに、答申において教養教育の一層の充実を図るため新たな教養教育の構築が求められています。この中で、「教養教育は学生に国際化や科学技術の進展等社会の激しい変化に対応しうる統合された知の基盤を与えるものでなければならない」とした上で、「各大学は理系・文系、人文・社会・自然といった、かつての一般教育のような従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や単なる入門教育でなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法等の知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養に努めることが期待される。このような観点から、教養教育に携わる教員には高い力量が求められる。加えて、教員はプロとしての自覚を持ち、絶えず授業内容や教育方法の改善に努める必要がある。入門段階の学生にも高度な知識を分かりやすく興味深い形で提供したり、学問を追究する姿勢や生き方を語ったりするなど、学生の学ぶ意欲や目的意識を刺激することも求められる。」と述べられています。

大学設置基準の大綱化（平成3年）を契機とする教養部の廃止と教養教育の全学的実施体制の再構築により、教養部が存在した頃と比べてはるかに多くの教員が教養教育に参加しています。専門教育が学部・学科のチームワークで成り立っているように、教養教育は全教員のチームワークにより成り立っています。チームワークを発揮するためには、中心となる組織が必要です。弘前大学の場合には、21世紀教育センターがその組織です。

先生は皆、優れた教員になりたい、優れた授業をしたい、卒業生が元気で活躍していて欲しいと願っ

ています。多くの先生がすでにご存知のように、Chickering と Gamson が米国高等教育学会誌（1987年）に発表した“優れた教育についての7つの原則”は次のようなものです：1. 学生と接触する機会を増やす、2. 学生間で協力し合う機会を増やす、3. 能動的に学習する手法を使う、4. 素早いフィードバックを与える、5. 学習に要する時間の大切さを強調する、6. 学生に高い期待を伝える、7. 多様な才能と学習方法を尊重する。

大学の使命が教育、研究、社会貢献とされているにもかかわらず、個々の教員にとって、教育に関する努力や創意工夫がきちんと評価されているという実感はなく、教育改善の動機付けが乏しかったと思います。また、授業改善の取り組みは個々の教員にまかされており、「あの先生はすばらしい授業をやっている」という評判は聞いても、そのことが組織に還元され、全体に波及することはありませんでした。

国立大学法人法により「学生に対し、修学、進路選択及び心身の健康等に関する相談その他の援助を行うこと。」が業務として規定されました（第22条2項）。これにより教育改善についても組織として取り組むべきことが明示されたことになります。

私がティーチング・ポートフォリオらしいものについて初めて耳にしたのは、20年近く前のことです。が、外国から帰国した人との会話の中ででした。『訪問先の大学である教授と面会したとき「研究成果としてお見せするものは何もありますが、このような教育をやっています。」といって冊子を見せてくれた。』というものです。“このような教育をやっています”ということを他人に紹介できる資料を身近にもっていることが大変新鮮に思え、前後の脈絡は忘れましたが、この部分だけをいまでも覚えています。この話を弘前大学のFDシンポジウムで紹介したとき、このシンポジウムを企画した本学の21世紀教育センター高等教育研究開発室の土持教授が、「それはティーチング・ポートフォリオ」のことでしょうと教えてくれました。

ティーチング・ポートフォリオのことを調べていくと、Peter Seldin という名前に行き当たります。Pace 大学教授で、“The teaching portfolio”（1991年初版、1997年第2版、2004年第3版）の著者です。教育評価・授業評価の専門家として世界各地の高等教育機関において、講演やコンサルティング活動をしております。昨年（平成2006年）来日し、大学評価・学位授与機構の公開講演会（東京）及び京都高等教育開発センターの公開シンポジウム（京都）において「学生の授業評価が授業改善につながる」と題する講演を行いました。

セルディンは“The teaching portfolio”の中で、芸術家や、写真家や、建築家が自分の優れた作品を人に見てもらうために持ち歩いているポートフォリオ（折りカバン）を大学の教員が自分の教育業績を提示するために用意することの有用性に触れ、このティーチング・ポートフォリオは教員のより公正な評価に役立つだけではなく、教員としての発展と成長にも役立つと述べています。

日本でポートフォリオが注目されるようになったきっかけは、2002年の学習指導要領の改訂にともない初等・中等教育に「総合的な学習」の時間が導入されたことだとされています（貫井正納 著「理科教育に役立つポートフォリオ評価」）。ポートフォリオ評価法は、総合的な学習の過程で得られた生徒の作品や実験の観察記録等さまざまな学習物を収集し、多面的に生徒を評価しようとするもので、理想的な評価法と考えられています。

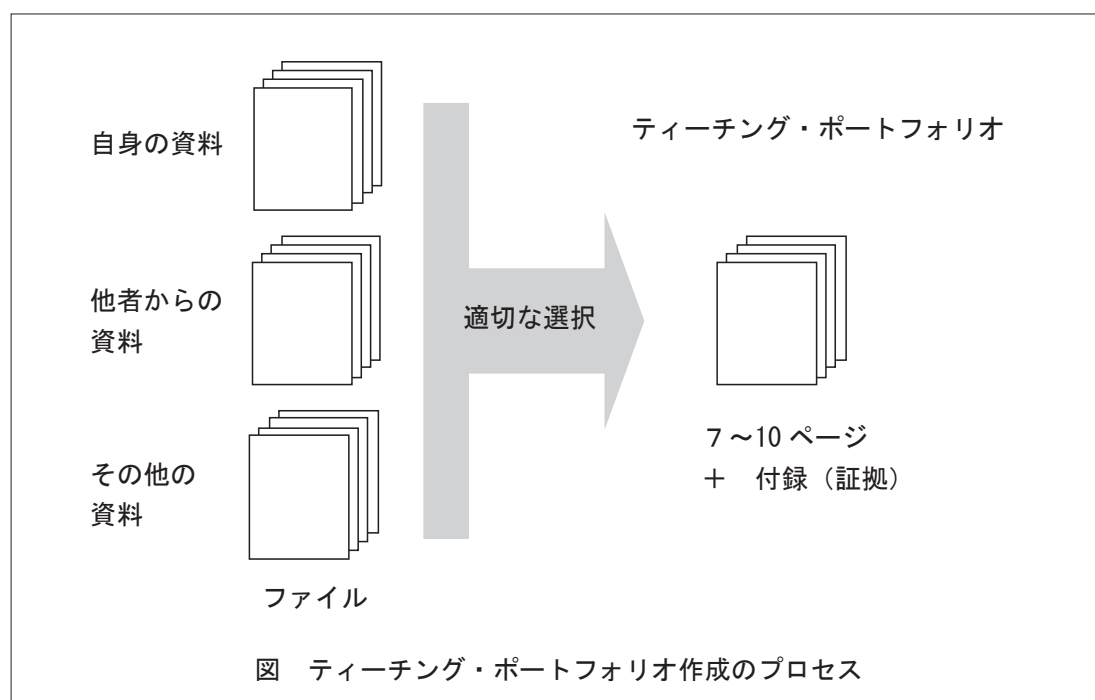
ティーチング・ポートフォリオは1980年代の後半にカナダの大学において teaching dossier として導入され、1990年以降アメリカで急速に普及しました。現在では世界中に拡大、普及しています。

ティーチング・ポートフォリオが大学に導入された理由についてセルディンは、一つには大学において教育を重視するという歴史的な変化が起こったことに伴い、大学として、教育の責務は何か、いかに改善に取り組んでいるか、教育をどのように奨励しているか等について、また個々の教員にとっても、自分の教育責務はなにか、教育業績はなにか、どのように改善しているか等について、教育重視の観点からの説明責任を果たすためと、もう一つは昇進や終身在職権（tenure）の審査において、候補者の履歴書に、教育業績の記載がなく、これでは教員の能力を評価できないのではないかという審査委員の困

惑に対処するためであると説明しています。

教員がティーチング・ポートフォリオを書く理由には、大きく分けると3つあります。一つ目は教員としての能力や授業の質を示す証拠として、すなわち学生による授業評価よりさらに客観的な記録として、昇進や終身在職権を得るために用いるため、二つ目は自分の教え方は学生を学習へと導いているか？ もしそうでないならばいかに改善すべきか？ さらには自身の授業哲学（teaching philosophy）をどう変えればよいか？ 等省察するため、三つ目は教員としての成果や経験を他の教員と共有する記録とするためです。

ティーチング・ポートフォリオは自身の資料、同僚や学生からの資料、及びその他の資料の中から、目的に応じて必要事項を選択し、7～10ページほどにまとめたものに付録として証拠書類を添付したものです（図1）。



自身の資料には、自身の授業哲学（personal teaching philosophy）、授業担当状況、及びシラバスが含まれます。授業哲学においては、どのような理念をもって教育にあたってきたか、教員としての信条は何か、学生に何を期待しているのか、指導・教育目標は何か、その目標を達成するための方法と取り組みはどのようなものか等について記述します。教員としての自身を省察する最も重要な部分です。また、授業担当においては、授業科目、授業の数、登録学生数、必修科目か選択科目か、学部の授業か大学院の授業か等を記述します。さらに、シラバスには、授業内容と目的、当該授業のカリキュラム全体の中での位置づけ、学術分野での位置づけ、例えば、微生物学の生物学全体の中での位置づけや医学における病理学の位置づけなどを記載します。また、授業の方法、書籍、宿題、試験、成績評価を記載します。この他に、自身の資料には、教授力を強化する行事である研修会や後援会への参加、カリキュラムの改訂と経緯、新たな取り組みとその評価、次の5年間の教育目標、授業改善への取り組み、すなわち自己評価により改善した点や、授業改善についての書物を読んだ時間等を記録した資料が含まれます。

他者からの資料には、授業参観した同僚教員の意見や感想、シラバスについて学生への指示や試験及び採点についての同僚教員の意見や感想、学生による授業評価のデータ及びそれに基づく授業改善への取り組み、優秀教員賞などの受賞記録、授業改善への取り組みについての大学の記録、卒業生による授業の質の陳述書などが含まれます。

その他の資料には、学生の試験の成績、学生の研究発表の記録、授業が学生の職業選択に役立ったことを示すもの、学生の就職や大学院進学への支援、授業に関連した出版物などが含まれます。

ティーチング・ポートフォリオはこれらの資料から必要なものを適切に選択して、まとめたものです。一般的な構成は、1.授業担当状況、2.授業哲学、3.授業方法、計画、目標、4.授業に関する記述（シラバス、配布資料、宿題）、5.授業改善の取り組み、6.学生による評価、7.授業の成果物、8.短期的・長期的教育目標、9.付録（証拠となる資料）です。

セルディンは2006年8月に行われた大学評価・学位授与機構の公開講演会で行った「学生による授業評価が授業改善につながる」と題する講演の質疑応答の中で、弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室の土持先生の質問に答えてティーチング・ポートフォリオに言及し、「ティーチング・ポートフォリオの最も重要な目的は授業を改善することです。これ以上いいやりかたは他にないと私自身思っています」と答えています（評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査報告書、2007年3月大学評価・学位授与機構）。

弘前大学では、2006年に、ティーチング・ポートフォリオがどのようなものであるかを具体的に知るために、カナダのダルハウジー大学で行われるワークショップに教員4名を派遣しました。ダルハウジー大学のワークショップは、ティーチング・ポートフォリオの意義・構成を含めた概要の説明に続いて、参加者各自がティーチング・ポートフォリオを作成するというものです。修了者には認定書が授与されます。2007年にも4名が参加し、現在各学部で一人はこのワークショップの経験者がいる状況にあります。

また、弘前大学21世紀教育センター発行の21世紀教育フォーラム創刊号（2006年3月）に同センター高等教育研究開発室の土持先生が「ティーチング・ポートフォリオの積極的導入-自己反省から授業改善へ」と題する論文を、第2号（2007年3月）に、ダルハウジー大学でのワークショップに参加した鬼島、木村、カーペンター、土持の4名の先生が連名で「Teaching portfolio（ティーチング・ポートフォリオ）自己評価報告書（教育活動）との対比」を発表し、学内への浸透をはかっています。

さらに、学内での学習会等を通じて、現在、弘前大学版ティーチング・ポートフォリオを基礎とする教育者総覧の構築に向けた取り組みが進行しています。教育者総覧〔弘前大学版ティーチング・ポートフォリオ〕は、教員がプロとしての自覚を持ち、授業内容や教育方法の改善に努め、教育能力の向上を図ることを目的としております。また教育総覧は、教員による教育活動全般に関する自己評価申告書として位置づけられています。

教育者総覧の導入により期待される効果として、「授業内容や教育方法について継続的に改善を試みることにより、教員の教育能力の向上が図られ、教育の質が保証されることが挙げられます。さらに、教員の授業に臨む姿勢、授業科目の特色・特性、が公開されることにより、学生にとっては履修科目を選択する際の資料となり、また模擬講義や公開講座等による高大連携や社会貢献を促進する際の有用な資料となることが期待されます。

教育者総覧の導入は段階的に行われます。平成18年度には1.授業に臨む姿勢、2.教育活動自己評価、3.授業改善のための教育に関する研修の3項目を導入します。「1.授業に臨む姿勢」において、学生へのメッセージを発信し、教員として当該授業を担当する際の態度を表明します。記載事項としては、自分の専門領域の魅力、授業設計の意図、カリキュラムにおける当該授業科目の位置づけ（他の専門領域との関連）、さらに、単位制の実質化を図るための試みとして、準備学習の指示、履修指導、学習目標と成績評価基準の明示等を挙げることができます。「2.教育活動自己評価」において、学生による授業評価の結果を受けて、授業内容及び教育方法をどのように改善したか、そのためにどのような工夫をしているか等を記載します。「授業改善のための学生による授業評価に関するアンケート」については、教育・学生委員会が分析結果をホームページで公開し、教員にフィードバックして授業改善に役立ててもらうことになっています。

しかし、学生から実際に授業改善がなされていないという不満も出されておりました。そこで、平成18年度に全教員が、学生による授業評価を踏まえ、さらに教員自身の授業実践を省みて、「授業改善計画書」を提出することになりました。平成19年度以降は、「授業改善計画書」は教育者総覧の、「2. 教育活動自己評価」に組込まれることになりました。「3. 授業改善のための教育に関する研修」においては、FD研修会等への参加状況を記載します。

この3項目までの各教員による教育者総覧フォーマットへの記入は現在7割ほどですが、すでにホームページに掲載されています。

現在、4. 授業の概要と具体的な達成目標、5. 設定した教育目標の達成度、6. 今後の教育目標とそれを達成するための方策 について、導入に向けて検討が続けられています。

ファカルティー・ディベロップメント（FD）は教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的取り組みの総称です。従前の大学設置基準においては、「大学は、授業内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。」と努力義務として規定されていました。2007年7月31日に大学設置基準の一部を改正する省令が公布され、2008年4月1日から施行されることが各大学に通知されました。これにより、大学教員向けの研修が、「・・・研修及び研究を実施するものとする。」と義務づけられることになりました。

昨年9月10日の朝日新聞に「大学卒業厳格に」という見出しの次のような記事が掲載されました：“大学の学部教育の見直しを検討している中央教育審議会の小委員会は10日、卒業要件の厳格化を政府と各大学に求める審議経過報告案をまとめた。政府には全学部共通で身につけるべき能力の指針を示すことを、各大学には卒業認定試験をするなど責任をもって卒業生の質を確保するよう求めている。「大学全入時代」を迎え問題になっている大学生の能力低下に歯止めをかけるのが狙いで、文科省は最終報告書がまとまり次第、具体的な対策に着手する方針だ。”

この報道のすぐ後の9月18日に、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会；学士課程教育の在り方に関する小委員会から「学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）」が公表されました。このうち、「第1節 学位の授与、学習の評価」において改革の方策として挙げられた項目の中に、「各大学には、組織的に学生の学習到達度を的確に把握・測定する体制を整えるよう求め、具体的には、学部ごとの特色に応じた学内試験の実施や、TOEICなど外部の試験の結果の活用など」が挙げられています。

さらに、「学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）」の「第2節 教育内容・方法等（3）成績評価」において「学習成果を学生自らが管理・点検するとともに、大学としてこれを多面的に評価する手法として、学習ポートフォリオを導入・活用することを検討する」ことが改革の具体的方策として挙げられています。

学習ポートフォリオは学生が、学習過程ならびに各種の学習成果物（例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表などを長期にわたって収集したもので、それらを必要に応じて系統的に選択し、学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題を見つけて、ステップアップを図っていくことを目的とするものです。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が組織としての教育の成果を評価する場合にも利用されます。

すでに述べましたが、2009年4月からFDが義務化されます。これを伝えた文科省からの通知「大学設置基準の一部を改正する省令等の施行について」（平成19年7月31日）には、留意事項が記載されており、「FDについては、これまで努力義務であったものを義務化するものであるが、これは大学の各教員に対して義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものである。これを踏まえ、各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組をおこなうことが望まれる。」と付記されています。

ティーチング・ポートフォリオの作成を通じて浮かび上がってくる授業改善への道筋が卒業生の質保

証へとつながることを祈念いたします。

(備考：第57回東北・北海道地区大学一般教育研究会の講演に、一部変更を加えたものです。)